

全国紙の記者を25年以上務め、人生の9割以上を東京で過ごしてきた。「それがなぜ広島へ」とよく聞かれるが、「緑があったから」としか言いようがない。あえて言つと「大学がつかないでくれた縁」だろうか。記者としてはさまざまなことを経験してきた。社会部新人時代に地下鉄サリン事件に遭遇。経済部に転じて多くの政財界関係者に会い、リーマン・ショック

# 想



ふじさわ しほこ  
藤沢 志穂子

## 大学が結ぶ秋田との縁

クなど景気の節目も見た。G20ほか国際会議も取材、米国の大学院に社会学もした。振り返れば「中央」を走ったつもりでいた、生感な記者だったろう。価値観が変わったのは、支局長として秋田に赴任してからだ。人口減少率や高齢化率が全国ワーストという東北の果て。だが豊かな自然と文化があり、時間はゆったり流れている。課題もあるが、全国に発信すべき

情報も多い。特に国際教養大は関係者の努力により15年あまりで一流大学になり秋田を有名にした。大学は地方創生の拠点となりうる。ITの進化と交通網の発達で、地方と都会の格差は距離も情報も縮まった。いま再び「地方の時代」では、新聞記事に加え、地元テレビ局の番組でコメンテーターも務め、そんな思いを、いい意味での「省着目線」で発信していた。

そこで、広島の大学から話を頂く。教養大のような新大学を立ち上げるため体制を強化するという。折しも所属先の全国紙は地方事業の縮小を進めていた。地方はそう捨てたものではない、ならば新しく前向きな仕事を、発信に加え実践を、との思いが募り広島行きを決めた。移り住んで半年。地域課題解決が信条でもある大学に籍を置き、個人的に関心があるのはり

カレント教育だ。産業構造の變化から、多くの上場企業が中高年の人員削減を進めている。では人手不足の地方で活躍してもらえないか。また金融庁の報告書が老後の資金不足を指摘した「2千万円問題」では、元氣なうちは働きたいと考える人が増えたはずだ。そんな課題にも向き合える存在になれないものか。私見として思う。

(県立広島大秘書広報担当課長)